

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 27 日現在

機関番号：53901

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770093

研究課題名（和文）和歌注釈における民俗学的手法の基礎研究

研究課題名（英文）Fundamental Research of non-Philological Approach in Waka Annotation Using Cultural Heritage

研究代表者

玉田 沙織 (TAMADA, SAORI)

豊田工業高等専門学校・一般学科・講師

研究者番号：60707389

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、和歌に対する注釈的営為に見られる非文献学的手法について追究し、前近代の日本人の「古典」との向き合い方の一端を解明した。この手法は使用者と同時代の事象を根拠に用いるものであり、俗語、方言や風俗などの生きた事象を参照するため、「民俗学的手法」と呼ぶことができる。

具体的な成果としては、次の三点が挙げられる。(1)古代後期から中世後期にかけての貴族文化圏における「古典」和歌に対する理解の一端を解明した。(2)歌枕書を通じて近世前期知識人層における「古典」理解の一端を解明した。(3)古典研究の大家とその周辺が和歌に加えた民俗学的言及のデータベース化を行った。

研究成果の概要（英文）：This research pursued a non-Philological approach in waka (31-syllable premodern Japanese poem) annotation, clarifying some attitudes of premodern Japanese toward “canon.” Since this approach uses facts from the day of the annotator, such as slang, dialect and custom, it could be defined as an “ethnological approach.”

Actual results are the three followed: (1) Unraveled a type of interpretation of a “canonized” waka among nobles from late ancient period to late medieval period. (2) Unraveled a part of the interpretation of “canon” among early modern intellectuals through Utamakura books (books analyzing waka place-names). (3) Assembled a database of ethnological comments on waka, made by famous premodern researchers and their school.

研究分野：日本古典文学

キーワード：日本文学 国文学 和歌 注釈 民俗学 古典

1. 研究開始当初の背景

本研究は、前近代の日本人にとっての「古典」のあり方を、和歌に対する注釈的営為を通じて追究することを目指した。前近代日本人にとっての「古典」の価値は、一般的には、遙かに仰ぎ見る文化遺産としての側面に認められる。それは貴族文化華やかにし頃の産物であり、平安期の『伊勢物語』を例に取れば、能『井筒』『杜若』においては創作の糧であった。したがって、古典世界は享受者の日常世界よりも高みにあり、倅い、学ぶ対象として仰讃されたが、その一方で、享受者達は、たしかに日常世界を生きていたのである。古典世界と「俗」「今」と呼ばれるような日常世界の架橋のありようの解明は、伝統を守り継ぐ意識の強い日本文化にとって有意義となる。

古典研究では伝統的に、成立期の文字資料を最優先させ、本文批判を厳密に行ういわゆる「文献学的手法」が主流を占める。それが最適の手法であることに異論はないが、博士課程在籍中の調査により、補助的ではあるものの、藤原定家、本居宣長といった大家や中山美石(1775-1839)等の本居派国学者が確実に、自らと同時代の事象を根拠に考察を行っていることが判明した。俗語、方言や風俗などの生きた事象を参照するこの方法は「民俗学的手法」と呼ぶことができる。

博士論文執筆の途上では藤原清輔、契沖や賀茂真淵に関する個別の事例報告も見出されたが、体系的な調査は、これまでなされていない。これはひとつには、近代以降、「民俗学」と文献学を主流とする「日本文学」とは、ややもすると相容れないかのように扱われてきたことによる。考察対象とする領域も、特に「古典」については、「日本文学」側から言えば、中央、貴族などの中心部は扱うが、地方、民衆などの周縁部は主として「民俗学」に任せるといった傾向が存在した。したがって、「日本文学」の領域たる和歌注釈に用いられた「民俗学」的手法には不明点が多いのである。いわば、学問領域の境界線上に位置するゆえに、見逃されてきた課題だったのである。

2. 研究の目的

本研究は、古典研究の大家とその周辺における和歌注釈の「民俗学的手法」を定点的に調査することで、和歌理解から捉えた前近代日本人の古典認識を新たに考究することを目的とした。「民俗学的手法」とは、注釈などの研究に際して自らと同時代の事象を証拠に用いる研究手法であり、換言すれば、当代を古典世界に直結させる手法である。そして和歌は、古代より文学史の柱であり続けた文学ジャンルである。和歌注釈における民俗学的手法の使用基準を分析することは、これ

まで仰讃の側面が強調されがちであった「古典」に対して、各人の「古典」範疇や価値の特徴を自ずと示すことになる。最終的には、前近代における「古典」概念を再定義することを目指した。

3. 研究の方法

本研究では、第一段階として博士課程在学中の調査で得られた手掛かりを元に対象者7名の事例を収集し、データベース化を進めた。手掛かりとしたのは、「俗」「今」といった、同時代の日常との結びつきを示す鍵語である。また、これと並行して、事例を収載する原本の調査を行った。原本調査は、一般的な資料の本文批判にとっても必要であるが、注釈的な著作は、複数の筆色や行間や欄外への書入を持つことも多い。よって、活字本では削除されるこれらの情報を実見する必要性はさらに高まることになる。

第二段階としては、データベースの並べ替え機能等を利用して人物間の比較を行い、傾向の分析に用いた。個別事例の報告は、随時行った。

4. 研究成果

(1) 古代後期から中世後期にかけての貴族文化圏における「古典」和歌に対する理解の一端を解明した。

平安時代前期に成立した『古今和歌集』は「古典」の中でも最も重要な作品であり、成立直後からその地位は確立されていた。歌数も多く、注釈的営為は多数あるため、通時的研究を行うのには適した作品である。この中から、本研究では平貞文「あり果てぬ命待つ間の程ばかり憂きこと繁く思はずもがな」(雑下・九六五)の受容を追究した(論文・発表)。

当該歌中の「憂きこと」は「辛いこと」と訳されるが、その抽象度の高さにより、受容者が様々な自らの思いを重ねることを許容する。詞書(詠歌状況の説明書き)からは免職された折の歌であることが分かり、以後、男性からはその通りの受容がなされた。しかし、官職にほとんど関わりがない女性が和歌集や物語の中で当該歌を想起する際には、「憂きこと」は一般的な辛さなどではなく、社会的制約の大きな性別を生きることから生じる辛さとして受け止められていたことが判明した。注釈のほとんどが男性の手になることもあり、成書化された受容からはうかがい得ない特徴だが、ここから、『古今和歌集』は、「古典」であるがゆえに厳密な学問の対象になると同時に、引用も含めた注釈的営為の文脈においては、暗黙の了解として、性差に基づく柔軟な受容があった可能性が

指摘できる。

研究の途上では、阿部泰郎氏の基盤研究 (S)「宗教テキスト遺産の探査と総合的研究：人文学アーカイブス・ネットワークの構築」の成果の一部として論文「を元に『室町時代の少女革命：『新蔵人』絵巻の世界』を同氏の監修の下で共著者2名とともに上梓し(2014年10月・笠間書院刊)また、Association for Asia Studiesにてパネル“Transgressive Tales in Premodern Japan: Gender, Sexuality, and Women’s History through *The New Chamberlain*”に参加し、パネリストとして発表を行った(2015年3月・シカゴ)。発表はさらにこれらを発展させて考察したものである。

(2) 歌枕書を通じて近世前期知識人層における「古典」理解の一端を解明した。

和歌において特定のイメージと結びつく地名である「歌枕」は長らく人々の想像力の源であり続け、例歌の提示や所在地の比定が、歌枕を研究する書物の中で熱心に行われた。研究の根拠に用いられる作品には当然、相応の価値が認められていることになるが、ほとんどの場合は現代でも認められる「古典」の範疇に含まれる。したがって、例外の抽出とその意味づけは、「古典」概念の問い直しにも繋がることになる。

研究開始当初予定していた調査対象者のうち、「文献学的手法」の大家と言われる契沖(1640-1701)は、晩年に一連の歌枕書を遺した。勅撰和歌集や私家集に加えて『夫木和歌抄』『歌枕名寄』などの私撰集その他まで参照したこれらの書物には、契沖が最終的にたどり着いた地点が示されている。本研究では、歌枕書に参照された書物とその性質を追究した(論文・発表)。

契沖の歌枕書として有名なのは二種の『勝地吐懐編』であるが、これらの出版後も契沖は考察を続けた。契沖の主な手法は文献学的なものであるが、自身の見聞なども交えているため、注釈に際しては柔軟な姿勢で臨んでいたことが分かる。また、詳細は今後に譲るが、成書に当たり参照した書物の間には、明確な順位付けもあったようである。

本研究では、これらに加えて、契沖の死の三年前に成った最後の歌枕書である『類字名所外集』について、伝本調査および成立過程の追究を行った。成立過程については、著名な作品が板行されればその本文を参照していたことや、『源氏物語』のような虚構作品までもが参照されていたことが明かとなった。

研究の途上では、国文学研究資料館平成26年度共同研究(課題)「読書 人・モノ・時空」にも参加し、読書の成果としての作品化という観点からも、契沖の著作を取り上げた。

(3) 古典研究の大家とその周辺が和歌に加えた民俗学的言及のデータベース化を行った。

本研究では、課程博士論文の成果を引継ぎ、対象範囲を広げる形で作業を進めた。調査の過程で、事例が手薄であった中世資料を新たに加えることが判明したため、原本調査および追加の事例入力を行い、合計7名の情報を収集した。

成果の詳細は今後に譲るが、古代および中世前期の民俗学的言及の事例が散発的なものに対して、中世後期以降の事例は比較的豊富である。現存資料が飛躍的に増えることも影響しているようだが、当該時期以降は、和歌に対する注釈的営為の中で積極的に「民俗学的手法」が取られていた可能性が指摘できる。

むしろ、「文献学的手法」の次善の策として用いられている場合も多いが、日常世界に属する事象を積極的に古典世界に接続させる姿勢は、「古典」に対して、遠くにある仰讃の対象以外の意味を認めていればこそと考えられる。

以上の成果により、本研究では、事例の収集によるデータベース化と、個別事例についての分析および報告を行った。これらの基礎的な研究の上に更なる資料収集と分析を進めることで、前近代日本人の「古典」概念の解明は進むであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

玉田沙織「平中『ありはてぬ』詠受容に見る女人の生」『名古屋大学国語国文学』107、1-14(2014)、査読有

玉田沙織「《書評》樋口百合子著『歌枕名寄』伝本の研究 研究編・資料編」『古代文学研究 第二次』92-96(2014)、査読無

〔学会発表〕(計2件)

玉田沙織「『類字名所外集』生成論」国文学研究資料館平成26年度共同研究(課題)「読書 人・モノ・時空」2017年3月14日、国文学研究資料館(東京都)

玉田沙織「中世後期女子教育から見た『新蔵人』絵巻」日本文学協会第35回研究発表大会、2015年7月5日、奈良女子大学(奈良)

県)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

玉田 沙織 (SAORI TAMADA)

豊田工業高等専門学校・一般学科・講師

研究者番号：60707389